

## 1. はじめに

中国の戯曲や小説を研究するにおいて、その起源を探るということは、重要なことと思われる。世界でも稀にみる古い中国文明における文学のジャンルの成立について考察することは、人類学的な意味においても重要で、興味のあることであるはずである。この研究は、中国近世の小説・戯曲の作品の元型を、時代をはるかに遡る先秦の文献中の物語の中に探り出し、とくに巫覡の役割について探ろうという研究である。

## 2. 小説の場合について

まず小説の分野の通説から述べてみる。中国小説史の記念碑的作品と言え、何と云っても魯迅の『中国小説史』(1923年)である。小説史の起源についてどのように叙述されるかと言え、まず「小説」という言葉の出典として、『莊子』外物編の一文が引用される。

外物編に出てくる「飾小説(小さなことを大げさに話す)」の「小説」が、この言葉の初出とされている。だからつまらない価値のない話というのが「小説」の初出の際の意味とされている。莊子は、『史記』の「老子韓非列伝」の中に短い伝記が書かれており、「與梁惠王・齊宣王同時」となっている。梁惠王は在位 BC369～319、齊宣王は在位 320～301 であるので、戦国時代中期、おそらく紀元前 4 世紀ごろに書かれた可能性が高い。もちろん書物としての『莊子』と人物としての莊子の関係については、疑念が無いわけではないであろうが、これは本稿の目的ではないので、特に論究はしない。

小説という用語も実態も、これ以降も発展し、『前漢書』芸文志に著録されている。

書物と言っても、当時は紙はなかったので、竹簡や帛書に書かれていた。戦国までに書かれた書物は、事実か伝説かはよくわからないが、秦の始皇帝の焚書によって相当数焼かれてしまった。前漢時代になると、広く残った書物を献上させて、復活を目指した。特に武帝(BC140～89)のころには市井のものに至るまで集めさせ書写させて、宮中で保管していたらしい。しかし、それも時間の経緯と共に、散逸してしまった。成帝(BC32～BC7)の時代になると光禄大夫劉向などに命じて書物の分類と記録をさせる。この作業は彼一代では終わらなかった。次の哀帝(BC6～BC1)は、子の劉歆に続けさせた。出来上がったものが『七略』(亡)という目録書である。この『七略』をもとにして作られたものが、現存する最古の目録である、班固の『漢書』芸文志である。『漢書』芸文志では、すべての書籍を六類・三十八種に分類し、596 の書名を記録している。

さて、『莊子』に初出する「小説」も前漢の末の頃には、文化のジャンルの一つとして独立しているのである。六類三十八種に分類された書籍文化(実際には紙ではなく、竹簡・帛書に書かれたもの)のうち、大きな分類である六類を挙げると次のようである。(あえて○印を付けて、区分が見やすいようにした。)

○六芸：易・尚書・詩経・礼・春秋などの五経と、論語・孝経・小学等。

○諸子：儒家、道家、陰陽家、法家、名家、墨家、縦横家、雑家、農家、小説家

- 詩賦：屈原賦等
- 兵書：兵權謀, 兵形勢等
- 術数：天文, 曆譜, 五行, 蓍龜, 雜占, 形法等
- 方技：医經, 房中, 神仙等

以上が大きな六分類であり、後ろにその中の主な内容を抜粋して書いた。これで見ると、六芸類という、当時のもっとも重要なジャンルの次に位置する、諸子類の十家の中に小説家が入っていることがわかる。紀元前1, 2世紀の文化の状況を反映している。

儒家から始まり、道家と続く十家の最後に位置するのが、小説家である。小説家と分類される文化の評価は、儒家などの立派な思想家たちと比べて低く評価されているが、それでも諸子十家の一家として位置づけされている。

小説家の中には、具体的な書名として十五篇ほどの書名が記されている。それらはすでに、散逸しているので、内容を読むことはできない。しかし、書名だけでも推測できるところがあり、2千年ほど前の文化の状況を知るための貴重な資料と言える。

これらを少し仔細に見てみると、一つの特徴的な作品群が見える。『周考』『青史子』『師曠』『務成子』『天乙』『臣壽周紀』等の名前である。これらの書名から見ると、簡単な史実を記したようなものである。小説の総論に「街談巷語, 道聽塗説」と言われるように、些末な出来事を記録したようなもののように見える。事実このような小説の一つの伝統は、確かに後世にも継承される。

次に特徴的な作品群は、『伊尹説』『鬻子説』『宋子』『黄帝説』『待詔臣安成未央術』『虞初周説』などの名前である。これらは、みな道教と関連していることである。例えば書名に「伊尹」「鬻子」「黄帝」などの名前が見えるが、これらはいずれも伝説上の道士である。『宋子』には、「其言黄老意。」と注がある。黄老の意味を述べているというのである。黄というのは黄帝のことである。老というのは、老子のことである。老子・荘子の思想を含むが、それを発展させ不老不死などの方向へ進展させた思想である。これ以外にも「道家」「方士」などの注が見える書名は、みな道家思想と関係する。また『虞初周説』については、『漢書』芸文志とは別に、『文選』の張衡の「西京賦」の中に、「小説九百本自虞初」という一文があり、薛綜の「小説醫巫厭祝之術, 凡有九百四十三篇」という注がつけられている。『虞初周説』は、医巫や厭祝の術であるというのであるから、やはり巫覡とも関係している。

では道家思想とは何かという問題になる。そのことについては後述するとして、先に述べなければならないことは、『漢書』芸文志は、中国の歴史のなかで最古の書籍目録である。そして、最古の書籍文化に対する分類である。したがって、現在の目から見て、あまり整理されていないと思われる点も少なくない。先取りして結論を言えば、後ろに○術数、○方技と分類されたものの中にも、道教思想と分類されるべきものも含まれている。○術数の中で言えば、五行, 蓍龜, 雜占とされているのは、道教思想である。また○方技の中の、医經, 房中, 神仙というのも道家思想である。道教思想と、小説とは基本的に異なる文化である。しか

し、思想的には共通している。また特に最後の○術数の中の、神仙と分類された書名書物の中には、あるいは神仙小説というような内容が、一部含まれていたかもしれない。

さて、道家思想について説明しなければならない。特に、巫覡と道家思想との関係について、述べなければならない。私は中国思想の専門家ではないので、道教思想についてほとんど研究したこともなければ、自身でも理解しているとは到底思えない状態である。しかし、近年それを自分で研究する重要性を痛感しているという程度であるが、論述の都合上、無理をしてもある程度述べなければならない。

『周礼』という本は、中国古代である先秦時代の官職について記録しているものである。古代の官職の宗教的な意味についても、網羅的に記録されているように思われる。天官篇、地官篇、春官篇、夏官篇、秋官篇、冬官篇の六篇に分かれている。特に、春官篇の部分には宗教的行事を司る官職、古代の巫覡についてよく説明されているように思われる。『周礼』は、古代の書籍なので、あまり論理的ではなく、よく整理もされてもいない。したがって、その内容を整合的に説明するためには、相当な研究が必要なのであるが、今その準備がない。しかし、論理的で整合的でないのであるから、逆にこの春官篇の一部を取り上げるだけでも、ある程度の説明をすることもできるわけである。春官の主催者で最高位の位にある大宗伯や小宗伯の職になると、彼らは大きな国家的行事に携わっていたらしく、その職の説明は大げさな記述が多く、我々の理解を超えるところがある。

ともかく、巫覡の職は、上は大宗伯、小宗伯に始まり、中間の位置と思われる大卜があり、それ以下の階級の占卜者がいろいろあった様子がわかる。

占卜の方法は、「兆」と言っても玉や瓦や大地の亀裂の様子から占うもの、「易」のように選び出した卦の様子を見て判断するもの、「夢」占いの三種があったようである。現在でもよく知られる「易」も、これ以外に「連山」「帰蔵」と呼ばれる、今は散逸した別のものがあつたことがわかる。これらの三つの方法に共通する要素は、予言である。宗教者である巫覡の基本的な仕事は、やはり予言である。世界中どこのシャーマンも同じであろうが、予言、予知はその重要な仕事の一つである。

注目されるのは『易』の存在である。不思議なことは、占いという性格上「易」は道家にふさわしいように思うが、これと反対の立場にある、宗教性をある程度排斥する儒家の中でも最高經典に位置付けられている。十三經の順番が、必ずしも重要性に応じて並べられているわけではないが、最初に位置するのは『易經』なのである。これは最初の文献目録である『漢書』芸文志から始まり、次に編纂される『隋書』経籍志も同様であり、以降ずっと続く中國目録学の伝統となる。

道家思想においても、儒家思想においても『易』はなぜ重視されるか。中国思想史の研究においても、重要視されいろいろ議論されていることと思う。私は、中国思想の専門家ではないので、そのようなことに関する論を読んだことはない。私自身も「易」に関心を持ったことが無かった。しかし今回巫覡について関心を持つようになると、「易」を読まざるを得なくなった。読後の簡単な感想は二つである。

一つめは、「易」の仕組みについてである。「易」というのは、陽爻と陰爻と呼ばれる二種類の爻を、六つ合わせて一つの卦を組み合わせる。六段に重ねてその文様を決定する。そうすると、2の6乗の組み合わせがあり得るので、結果六十四の組み合わせができる。それぞれに、「乾」とか「坤」等の固有の名前を付して、それぞれの陰爻・陽爻の並び方をもとに、未来を予言するものである。そうすると、なぜ二種類の単純な爻の6つの組み合わせの図像を使って、未来を予想できるという考え方が成立したのかということは、まず誰もが持つ大きな疑問である。このような「易」の成立前史については興味を持たれるが、これについてはまだ調査していない。

二つめは、通読し終わったわけではないが、『易』を読んで私が感じたことは、「易」は救済の書であるということである。今まで『易』は、卦の不思議な記号が並んでいて、とりつきにくい本だと敬遠してきた。しかし読んでみるとそうではなく、理解しにくい点も相当にあるが、結果としては、人間には希望があるということを教えてくれる本だということである。経学の諸経について、『詩経』は文学であるので別にして、『儀礼』『周礼』『礼記』『尚書』『春秋』『孝経』等について、必要に応じて部分読みをする程度であった。いずれにしても難読なことも有り、息苦しさを覚えることの方が多かった。特に『礼』関係の本は、上下の関係や秩序を強調するものが多く、古代は息苦しい世界だったのかと想像する程度だった。ところが『易』は、陽と陰という二つの対立する要素から、世界や未来が説明される。細かな例は省略するが、陽爻があれば良い未来が続くそうであるが、同じ比率で陰爻もあり、良くない要素も出てくる予言もされるのである。未来は良いことも有りうるが、それが良くない方向へ転げ落ちることも有りうるというのである。その逆の場合も示される。それが何か長々しい理屈ではなくて、端的に明るい未来が示されている。利用する本人が不幸のどん底にある場合には、希望を感じる可能性もあるわけである。もちろんその逆もある。ただ幸も不幸も、一つの状態に固定されるわけではなく、常に循環しているのだという考え方なのである。そのような意味で『易』は、救済の書だと結論できるだろう。

道家思想の話に戻る。今まで述べてきたことの中で必要なことを、もう一度まとめてみる。漢代の文化状況を示した『漢書』芸文志の中で、小説家に分類される作品には、道家思想と関連するものが多くあった。道家思想と言うと、もちろんその前の春秋戦国時代の「老子」「莊子」の思想と大きく関係している。しかしそれだけでなく、中国思想史の常識として、特に漢代以降に成立し、張陵の五斗米道や大平道などのように教団の形式を持つ集団を指す。道教思想の教団については、もう完全に私の能力を超える中国の歴史的思想史的問題であるので、結論としてそうになっているとして、これ以上は本稿では述べないこととする。ともかく、通常に道家思想と呼ばれるものである。そして最初に、先秦の巫覡は、その活動の一つとして「易」を使って予言することも述べた。この予言することは、知られるように世界共通のシャーマンの特徴である。

そうすると、ここに「易」等を使って予言をする古代のシャーマンとしての巫覡と、先秦時代の「老子」「莊子」の思想と、漢代の道教思想とそれに影響された小説家というジャンルの作品という、一見すると無関係なばらばらなものが並んでいるのである。もちろん私も今まではそう思っていた。しかし、これまで

調べて来て、特に「易」の思想から気づいたことであるが、これらには共通の要素があるのではないだろうかと思ひ到るようになった。それは、「救済」ということである。『老子』『莊子』の思想そのものについては、特に何も論述していなかった。そこで、例えば『老子』が救済の思想であることについては、その第八章の一部を引用すれば、有名であるのですぐに理解していただけると思う。

上善若水。水善利萬物而不爭、處衆人之所惡、故幾於道。

(最上の善というものは水の存在のようである。水は全てのものに利益を与えるが他のものと利益を争ったりはしない、自身は低い地面にあって時には濁っていたりして人から卑しいと思われたりもする。だから水の存在は、大いなる道の姿とよく似ている。)

### 3. 演劇の場合について

演劇の成立と歴史について、私は別に資料を収集して別な研究で述べるつもりである。